アメリカン・ボード宣教師文書

―同志社女学校女性宣教師を中心として―

〈スタークウェザー書簡―訳および註―〉（１）

坂　本　清　音　監訳
秋　山　恭　子

Abstract

This paper is a translation with notes of the letters from Alice Jeannette Starkweather, the first woman missionary who took a post at Doshisha Girls' School (1876-1883). Materials are taken from the microfilms of the American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM) owned by Horton Library, Harvard University. They are very valuable to the history of DWCLA, because its early history has been very little known until recently. By deciphering the handwritten missionary correspondence on the microfilms, we can gain a vivid picture of the times and the inter-cultural struggles between American missionaries and Japanese men and women in old Kyoto. We also get a deeper understanding of the thinking of the missionaries sent from the American Board at that time. We sincerely hope that our translation helps many people learn about the early history of DWCLA.

はじめに

今回の翻訳作業は、英語英文学会主催の卒業生対象セミナーに端を発している。すなわち、2009年度春コース第１回（５月30日）の講師を引き受けることになった時に私の心を過ぎったのは、「この人たちの祈りと献身がなければ、決して始まることのなかった」同志社女学校創設の歴史を語り伝えるには又とない機会になるとの思いであった。その歴史は、私の学生時代にも、

教員になってからも、周囲の同志社関係者からほとんど聞くことのなかった同志社女学校の始まりと、それに続く苦渋の歴史である。それを同志社女子大学に連なる者が、「知らなかったわ。学ばなかったもの」で済ませていいのかとの思いもあった。

そこで、「アメリカン・ボード宣教師文書を読む―同志社のキリスト教女子教育の源流とその後―」と題を決め、そのための第一次資料である宣教師文書を読むことを通して、歴史の語り部となる仲間を募ることにした。その結果、現在は約12名の卒業生（中には横浜からの定期的な参加者もいる）が、毎月１回土曜の午後ジェームズ館で勉強を続けている。具体的には、同志社女学校初代「校長」[1]の女性宣教師 Alice Jeannette Starkweather（1849- ？）の書簡を翻訳しつつ、女学校が始まって最初の７年間の歴史の勉強である。

奇しくも今年2010年は、アメリカン・ボード設立200年を記念する年である。その年に長年の思いが成就されて、仲間との勉強の成果を発表する機会が巡ってきたことを感謝している。

はじめに、これらの書簡を読み解く際に必要ないくつかの用語、および同志社とアメリカン・ボード（ウーマンズ・ボード）との関係を簡単に記しておく。

〈アメリカン・ボード〉

アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）とは、1810年６月マサチューセッツ州において設立されたアメリカ最古の海外伝道会である。その設立経緯として、４年前の1806年８月、ウィリアムズ大学（William College）の学生数人がキャンパス内を散歩中ひどい雷雨に襲われ、傍らの干草の山かげに難を逃れたとき、熱心に世界伝道について語り合ったこと、そして自分たちこそアメリカ宣教師の魁になろうと誓い合ったというエピソードがよく知られている。その青年たちの志を受け止めてアンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）が

設立され、海外伝道を実現するために超教派の特別委員会（アメリカン・ボード）が組織されたのである。

〈ウーマンズ・ボードの発足〉

この伝道事業は男性中心で始まったけれども、実は当初から女性の関与なしには成り立たなかった。なぜなら、アメリカン・ボードから海外に派遣される宣教師には夫人同伴が原則であったし、また教会における熱心な献金者としての女性の役割は無視できなかったからである。しかし、女性の力が純然たる「女性の仕事」として認識され評価されるようになったのは、1868年にウーマンズ・ボード（Woman's Board of Missions）が、アメリカン・ボードを補佐する機関として発足してからであった。

ウーマンズ・ボードは教派別女性団体としては、アメリカで一番早いスタートであり、最初はボストンを中心に（東部）ウーマンズ・ボードが1868年１月に、次いで同年９か月遅れでシカゴに中部ウーマンズ・ボード（Woman's Board of Missions of the Interior）が、そして５年後の1873年に太平洋ウーマンズ・ボード（Woman's Board of Missions of the Pacific）がサンフランシスコに設立された。その中で、継続的に同志社女学校を支援したのは、太平洋ウーマンズ・ボードであった。

〈同志社との関係〉

このアメリカン・ボードおよびウーマンズ・ボードと同志社（英学校および女学校）の関係は、まず、創立者新島襄（1843-1890）がアメリカン・ボードの準宣教師であったこと、新島の帰国以前からアメリカン・ボード宣教師は関西を中心に伝道活動を開始しており、早晩、伝道者養成学校の設立を計画していたこと、そして結果的に、京都でその学校［同志社］の開校が可能となったことが直接の関係である。

〈同志社女学校との関係〉

特に京都での女子塾開設に関しては、J. D. デイヴィス（Jerome D. Davis 1838-1910）宣教師がまさに牽引車の役割を果たした。彼は神戸時代に宇治野村英語学校の特別教室、女性と子供の学校（神戸女学院の前身）に関わったことから、日本におけるキリスト教女子教育の重大さを実感し、新島が京都に男子のための英学校創設のために尽力しているときから、女学校の設置に必要な女性宣教師の京都への派遣をアメリカン・ボード本部に訴え続けた。

折しも、ウーマンズ・ボードはアメリカ独立百周年記念の募金を計画していたが、デイヴィスの女性宣教師派遣の要請を耳にして、6,000ドルを京都の女学校のために捧げようと呼びかけた。その募金のおかげで、同志社女学校は初めて、二条邸跡［現女子中高静和館位置］に自前の校舎を持つことができた。

〈本国での役割〉

では、海外伝道局としてのアメリカン・ボード（ウーマンズ・ボード）の主たる仕事とは何であったか。まず海外に送り出す宣教師の募集と任命である。その上で、彼らの支度金・渡航費・給料を含む現地での生活費・伝道費を保証し、時には、伝道事業に付随する建造物などのための多額の資金を用意した。

特に、女性宣教師に対しては、ウーマンズ・ボードが資金面ではすべての責任を負った。その方策として、各地に教会関係の女性・子供たちの組織作りを奨励し、それらを有効に用いて献金を集めることに最大の努力をした。しかし、派遣宣教師の人選に関しては、ウーマンズ・ボードが持っていたのは推薦権だけで、決定権はアメリカン・ボードにあった。

〈宣教師の遺したもの―宣教師文書の意味と重要性〉

以上のような種々の支援を受けて世界各地に派遣された個々の宣教師には、当然のことながら、援助金の使い方とその成果をつぶさに支援団体に書き送る義務があった。その一つ一つの報告書がいわゆる宣教師文書であり、それは結果的には、リアルタイムで保存された当時の現場の、ありありとした記述であり、生の声の歴史となっている。

宣教師たちは派遣された土地の異文化の中で、自分たちの使命であるキリスト教の伝道のために奮闘した。その体験は、まさに異文化摩擦の中を生き抜いた、あるいは、挫折した人間の生きざまであり、それは、さまざまな価値観の中で折り合いをつけて生きていかねばならない、現代にも通じる人間関係の歴史でもある。

なお、本書簡はハーバード大学ホートン・ライブラリーが所蔵する資料（Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions）の中から、スタークウェザー書簡（書簡番号238/239/240/74/241/242/243/76）を翻訳し、註を付けたものである。利用したマイクロフィルムは、同志社大学人文科学研究所ならびに同志社大学総合情報センター所蔵のものであり、翻訳して公刊するに当たっては、Modern Books and Manuscripts, Houghton Library, Harvard University と Wider Church Ministries, United Church of Christ から許可を得ている。(By permission of Houghton Library and Wider Church Ministries)

1　宣教師文書の中では、同志社女学校（「京都ホーム」と呼ばれていた）の教育および経営の責任者は女性宣教師（代表者１人）と位置づけられ、それ故に Starkweather は “principal” または “head” と記述されていた。しかし、日本側の正式文書では、新島襄が校長なので、ここでは括弧付きで表記した。

Starkweather 書簡翻訳

〈238〉【坂本清音 訳】

イリノイ州エルジン[1]にて、1876年２月４日、クラーク博士[2]宛

拝啓

これほど早くあなた様のご要望にお応えして、写真を同封してお送りできますことを嬉しく存じます。ウーマンズ・ボード世話役（幹事）の方々は、私が出国準備で疲れ果てる前に、写真を撮るようにと言って下さいましたが、助言通りにはいきませんでした。

出発の時が近づくにつれて、どうかお祈りに加えてくださるよう切にお願い致します。主のご用のために新たな献身を誓う時に、神様が特に傍にいてくださることを強く願います。

敬具

アリス・Ｊ・スタークウェザー

追伸：生前にはお会いできないかもしれないボード本部の役職者の方々のお写真を、ウーマンズ・ボード世話役の方々も頂戴したいと言っておられます。私も同感です。

1　スタークウェザーはコネチカット州ハートフォードの生まれであるが、1874年、25歳で家族と共にイリノイ州エルジンに引っ越していた。従って、本来なら中部ウーマンズ・ボード派遣の宣教師になるはずであったが、出発間際に太平洋ウーマンズ・ボードの支援宣教師となった。

2　Nathaniel G. Clark（1825-1896）1865年からアメリカン・ボードの総幹事に選ばれ、1894年ボードを引退するまで、外国通信部の全責任を引き受けた。クラークの行政を最も顕著に特徴できる２つの出来事は、日本ミッションとウーマンズ・ボードの開設である。

〈239〉【坂本清音 訳】

イリノイ州エルジンにて、1875年11月16日、クラーク博士宛

拝啓

11月11日付のあなた様の書簡を昨夜受け取り、入念に拝読いたしました。同封くださいました書式に記入して急ぎ返送いたします。

今のところ近影はありませんが、近いうちに入手できると思いますので、ご要望のその部分には喜んでお応えいたします。詳しい情報と小切手をお送り下さいましてありがとうございました。支給された325ドル[1]という額には、旅行用品を購入するために必要な交通費も全額含まれていると考えてよろしいでしょうか？

その場合、あなた様のご好意の50ドルはウーマンズ・ボード経理係のところにある私の口座に入れることにしますが、325ドルは現実に必要な旅行用品代だけか、それを購入するための交通費も含んでいるかが分からなくて、お尋ねする次第です。

書式に記載されていた旅行の切符や、特に貨物のことはまだ考えなくていいのでしょうね。いずれ時が来て私たち全員がシカゴに集合する時には、そこに挙げられているような手筈が整えられて、経験豊かなサリット様[2]からのご指示があると考えてよろしいでしょうか。

この仕事に献身するにあたり、主のみ名を称え、主の許に尊い魂を導き入れることが、私の最大の願いであります。そして今は、必需品一つ一つに心を用いて、現地に着いた時に、その品物がないために十分な働きができないことのないように万全の備えをしておきたいと願っております。

あなた様が聞いておきたいと思われるどのような質問にも喜んでお答えいたします。私の写真は、入手次第お送りいたします。

敬具

ＡＪＳ

1　当時の１ドルは、日本円の約１円に相当した。因みに、女性宣教師の日本での１年間の給料は600ドルであったので、半年分以上ということになる。日本では調達することの難しい衣服や家具・家財（ベッドを含む）、日用品などを用意することが多かったようである。

2　Mr. Searitt アメリカン・ボードの関係者であると思われるが、人物不詳。

〈240〉【坂本清音 訳】

日本の京都にて、1876年11月５日、ポロック[1]宛

拝啓

この異国での、あなた様からの第一信に感謝いたします。暫しの間、あの２階の執務室で、もう一度ご一緒しておりました。それがとても素晴らしいひと時であったことは言うまでもありません。でも今はあなた様を、そして母国の同労者の皆さまを、まさにここ京都にお連れし、当地での貴重な働きを見ていただきたいとの思いでいっぱいです。

そうです。私もまた、今この仕事に着手したと見なしていただけるはずです。経験豊かな友人は、親切心から、日本語の勉強をしている間は、仕事を始めないようにと忠告してくれましたが、すぐ傍にいて「これが行くべき道だ。ここを歩け」[2]という声を共に聞いた人たちは、「これは神の声です。私たちは前進して、神が導いてくださった仕事に着手すべきです」と、同意してくれました。あなた様からのお手紙が届いたときには、どうしても時間がとれず、皆さまが待ち望んでいて下さっている手紙を、そちらでの会合に間に合うようにお送りすることはできませんでした。前にお送りしていたブラッチフォード様[3]宛の手紙から、多少の事実はお分かり頂けたかとは思いますが…。

毎日毎日が宣教師に対する重要な要請で埋まっていました。そのような時には、私の仕事との関連で、今皆さまが最も興味を持っていてくださる京都の女生徒たちのためにやり遂げた直接の仕事のことをお知らせできる筈もありませんでした。

10月24日に女学校の正規の授業を開始しました[4]。それはデイヴィス先生[5]に京都在住許可が出て、昨年初めて入洛できた記念すべき日からちょうど１年と５日後のことでした。寄宿生４名と通学生８名[6]で、合計12名です。私

たちは、秋の初め頃には開校できるだろうとの感触を持って、興味を抱いて心待ちしていました。しかし、最後の最後まで最も理解ある友人ですら、「一体生徒はどこにいるの？確かにあちらこちらに溌剌とした女の子の姿はたくさん見かけるけれど、私たちの学校に来る女生徒はどこにいるの？」と、疑わしく怪訝そうに言っていました。ところが、「絶対に誰も来ないわよ」と断言していた女性が、それと気づかずに、最初の一人を連れて来たのです。私たちはずっと疑いながらも、神のみ心を探し求めていたのですが、この生徒の母親は、娘がぜひともイエス様のことと、英語も少し学びたいと言うのでと、この姉妹の所に、私たちの学校への入学を申し込みに来たのです。

別の所からも、似たような訪問がありました。信者である父親が、妻と子供に「心配しなくてもいいよ。神様が必ず面倒はみて下さるから」と言って召天しました。彼はそのような言葉を何度か言ったのちに、心から信頼して「今からイエス様の許に行く」と言って、召されていきました。すぐその後で、母親は宣教師の家族の許に小さな娘を連れてきて、引き取ってイエス様の教育をして欲しいと頼みました。その娘に開かれている門はどこにも無いようでした。話を聞いて私は心から可哀そうに思いました。彼女の手を取ってイエス様のところに導きたいとどれほど願ったことでしょう！このように門を叩いたのに拒絶され、イエス様の柔和な微笑みが二度と届かない所に引き戻されるなんて、私には我慢ができませんでした。彼女をどれほど学校に入れてあげたいと願ったことでしょう！でも私に何ができたでしょうか？

さらにもう一つ、聖霊が全く異なる所で働きました。それは、京都から350マイル離れた熊本のキャプテン・ジェーンズ[7]の学校の卒業生たちからなのですが、その中で最年少の生徒の一人[8]が、私のところに来て、これまで聞いたこともないような悲惨な話をしてくれました。彼らは、志の高い殉教者30名からなる熊本バンドの若者たちなのですが、ここの伝道者養成学校[9]の仲間に加わり、滅び行く日本国民に対して説教をする準備をしています。彼［下村孝太郎］と共に19歳の青年［金森通倫］[10]が来ました。その青年はイ

エス様を信じたために120日間座敷牢に閉じ込められ、京都に来る前にやっと解放されたのです。今はイエス様の王国を広めるために全力を捧げており、すでに心情だけでなく精神の面でも傑出した賜物の証をしています。彼は回心前のタルサスのサウロ[11]のような人であり、もしあなた様が今、彼の姿をご覧になり、熱心な彼の言葉をお聞きになったり、お読みになったりなされば、彼のことをパウロの再来だとおっしゃることでしょう。この国の人々が行動し忍耐できる、このような証を聞く場に居合わせるときほど、心が動かされたことはこれまでにありませんでした。

さて、少しの間だけ、ひ弱な体つきの、控えめで、まだ子供らしい体躯の14歳の少年を目の前に思い浮かべて下さい。年齢以上に真摯な顔つきをしており、体を少し前屈みにしています。それもその筈、７人姉妹の全員から救助者だと当てにされている「彼の家族の物語」をこれから語り始めようとしているのですから。覚えておいてほしいのは、日本でクリスチャンであることは、アメリカで皆さまが想像される以上に、しばしば大変な試練であり犠牲であり、直接に迫害を受けることですらあるということです。ですから、この青年たちがイエス様について学び、イエス様に従って生きようと決意することは、多くの場合、友人や身内との縁を切っており、それゆえ在学中は助教などをしながら生計を立てることになるのだと知っても、少しも驚くことではないのです。

学校で文法の教師が必要になった時に、全員がこの少年下村さんを指差して、「文法を教えるならこの人です」と言いました。「え、この少年ですか？」「もちろんそうです。文法と修辞学で彼はクラスでトップでした。」彼は最も純正な英語を話し、「詩篇」を周りのだれよりも純正で美しい日本語に翻訳します。あの遠くの学校で、彼は10歳か11歳のとき１年間にわたって学び、疑いと不信の間をさ迷った後、純粋な信仰で、救い主を受け入れた最初の生徒でした。そのために、今では死ぬまで主に従う覚悟ができている級友たちの、迫害に耐えた最初の人でもありました。私のために文章で書いてくれた回心

の簡潔な物語は、とても興味深いものです。特別に頼んで書いてもらったものですが、「神の愛」を示すものとして謙虚に語ってくれました。彼の声は、いつも祈祷会に参加する15〜20名の中にあります。祈祷会では、家の中のあちらこちらから、３〜４人が同時に祈祷の声を上げるのですが、最後には一人だけが先に立って祈るのです。実際にある学生は、４度声をあげて、やっと祈ることができたほどでした。しかし彼の祈りは全ての人の心を打ちました。そのように、ここには、はっきりした祈祷の精神が行き渡っているのです。

出来事の多かった、あの朝にこの少年に逢ってから、今日でちょうど１カ月になります。ああ、私たちの聞いたことを皆さまにも聞いていただけたら、、、。その日、デイヴィス先生は部屋に入ってくると、「さあ、君が僕に話してくれたように、スタークウェザー先生にも話してごらん」と言いました。その瞬間から、あの真摯な顔が私の方に向けられました。そして、私たちが彼の流暢な英語に耳を傾けていた時に、部屋の中で涙を流さない人は一人もいませんでした。彼の英語には、南国九州から来た子供が話しているのだと思い起こさせるだけの、日本語の慣用句と日本人らしい声がありましたが、、、。書いてしまうと、言葉の微妙な哀感は多く失われてしまいますが、簡単にご紹介します。

「私の小さな家族は父の放蕩のせいで落ちぶれてしまいました。毎日毎晩父は飲んだくれていました。それで、母は子供たち共々父の暴飲を悲しみ、もう飲まないで下さいと諌めました。しかし父は、母の穏やかな戒めの言葉を聞こうとしませんでした。ついに父は、しつこいと腹を立て母を離縁しました。日本ではよくある成り行きなのです。そこで、母は７人の娘と一人息子の家から追い出されました。一番下の妹はこんな辛い状況の中で生まれたのです。というわけで、父の悪習のために家の財産はすべてなくなり、とうとう家族は貧乏のどん底にまで落ちました。すると父は多額の借金をして、ついに返済不能というところまで行きました。そこで、父は家族を残して家を出ました。この間中、私は家を離れて学校に行っていたので、家族のトラ

ブルについて何も知りませんでした。事情を聞くとすぐに帰宅しました。その夜、私が泣いていると、父は家を出て行きましたが、夜が明けるとすぐに、借金取りが何人も私のところにきて、家の中のものを全部持って帰ると脅しました。私の心は平静でおられませんでしたので、家にあるものを全部売って借金を返しました。」

この時点で、金持ちの伯父が来て寛大にも孤児たちの面倒をみようと申し出たのです。しかし実際には、姉妹に必要な食べ物を与えませんでしたので、姉妹たちはお腹がすいたと言って泣きながら、よく孝太郎のところに来ました。一方伯父は手だてを用いて、その家族のものである僅かな年金を分捕っていたことが暴かれました。子どもたちは伯父の手から救い出され、彼の級友たちは、月々の自分たちの寮費と授業料を払う３ドルの中から僅かな余剰を出し合い、孤児一家の１カ月の生活費を賄うための５ドルを集めました。しかし、何ができるでしょうか？一番上が18歳の、この姉妹たちはこれまで学校に通わせてもらえず、イエス様のことは何も知りませんでした。とそのとき、涙を流しながらも一つの考えが私たちの頭に浮かびました。すなわち、姉妹たちの何人かは必ず私たちのところに来なければならないということです。どのようにして面倒を見るかは誰にもわかりませんでしたが、先ずは、弟を送り出して、３人の姉をつれて来させる道ははっきりと見えました。将来のことはきっと神様が備えて下さると信じました。

そこで、彼らが到着するまでの２週間のうちに、主はこれまでに与えてくださった核（少数者）だけで、学校をスタートさせることを願っておられると、私たちは固く心を決めておりました。私にはすでに京都でイエス様のことを教えてもらいたいと、扉をノックしている少女たちを受け入れる道が見え始めていました。［下村家の姉妹のために］集めた金額は３人を連れてくるには十分でないと分かりました。若い救助者は自分の汽車賃を子どもだから半額と勘定していましたが、もっと払わねばならなかったからです。そういうわけで、熊本からは２人[12]だけが来ました。しかし、３人目が神を知ら

ないままで大きくなることは考えられず、いずれ連れて来られると信じています。全員を受け入れるために私の部屋を開放しました。襖のお陰で、大変な企てと思われた事が実行可能となり、できるだろうかと疑念を抱いたことが戒められました。イエス様が私たちを導いていてくださることを疑うことはできません。私たちが謙虚に従えば、イエス様は備えて下さり、障害は取り除いて下さるのです。もし皆さまが、日本の少女や女性を待ち受けている偉大な未来に備えて、生徒たちが歌を歌い祈ることを学び、また毎日の勉強に励んでいるときの声をお聞きになれば、私たちの喜びを分かって下さり、費やした苦労全てに対する豊かな報酬をすでに受け取っているとお感じになるでしょう。生徒たちのために下着を用意するのに忙しくしています。ここ日本では、十分な衣服を身に着けることができないために早死にをするこどもが大勢いることを知ると胸が痛みます。当地では多くの人が結核の餌食となるのです。

生徒たちは立ち居振る舞いが可愛らしく、教えやすく、学ぶことにも非常に熱心で、祈祷会や礼拝には全部、出席したがります。

たった今も皆さまにご興味がおありだろうことを半分も書かないうちに、私の日本語の先生［本間重慶］[13]がもう一人の愛の対象[14]を持ち込みました。神様は彼女を私たちが世話すべきもう一人と考えておられると感じざるを得ません。もうすぐ郵便が出ますので急いでこの手紙を終えねばならないのですが、如何しましょう？昨夜私の先生ともう一人の熱心なクリスチャンは、午前中京都市内で説教をしてから、数マイル離れた伏見に行きました。彼らは干ばつのために人々が大変難儀をしていて、もう何か月も仕事がなく、家は取られそうになっているのを知りました。彼らが午後７時から１０時まで説教をした土地の人々は、福音を聞くのが好きな人たちなのですが、こんな困窮した状態では、彼らが説教をすることも、また人々が聞くこともできませんでした。「もし私たちを助けて下さるなら、福音を信じます」と彼らは言いました。もし11ドルが工面できなければ、10日以内に家を取られるので

す。このために、この家の人たちは17歳の長女を11ドルで身売りしようと決めていました。近づいている冬の間の住まいを確保しておくためでした。イエス様の名において、「そんなことがあってはなりません。いかなる少女も罪や恥のために売られることがあってはなりません」と私は彼に言いました。「大洋の両側でクリスチャンの心が息づいている間は」と私は考えながら、、、。私の先生は、その少女が私たちの学校に入学し救われることを親たちは願っていると確信していました。彼は真夜中に戻って来て、今日の早朝に貧乏な級友たちに語りました。級友たちは信仰と教養は豊かなのですが、一番の金持ちでも食費と月謝を払うための月３ドルしか持っていません。だから募金などできる筈もないのです。私はミッションの他の人と相談する時間はありませんでしたが、その少女は救われると信ずる信仰は持っていました。だから必要なら、後のことは信じて、自分の財布から払うつもりです。10日と11ドルだけが、若い女性と、天国か地獄（永遠の滅亡）との間に立ちはだかっているのです。先生を安心させようと思って、私は間違ったことをしたでしょうか？私の先生は大層心を乱し心配していましたから、もし必要なら彼女のあがないのためにお金を払うと誓約してしまいました。彼女のような生徒が学校に入ってからどのようにしてお金が備えられるかなどは、今の私には分かりませんが、私には信仰があります。私たちの手中に、彼女のような人を連れて来られる方は、その業を引き受けられる方、御業を祝福し手助けをする心や手を与え続けるお方です。

私の先生は郷里に帰って安息日には１日３回400人以上の会衆に説教をしながら夏中働かれました。彼が過労で体を壊して働けなくなることを、ただただ心配しています。先生は労働に疲れることがないのです。どうか神様が私たちすべてに祝福を与えて下さいますように。私たちのためにもっともっと祈ってください。そうすれば、共に収穫を喜ぶ日はもうすぐです。

敬具

ＡＪＳの署名

1　Miss Sarah Pollock は中部ウーマンズ・ボードの書記（４人の内の１人）。『同志社百年史』資料編二（p.163）の中で、Miss Follock と出ているのは、Pollock の読み違い。

2　旧約聖書「イザヤ書」30：21。以下、聖書は『新共同訳』（1987年）を使用する。

3　Mrs. E. W. Blatchford は中部ウーマンズ・ボードの筆頭書記。機関誌 *Life and Light for Woman*（1876年４月号）の中で、“Our Centennial Work” と題して最初にアメリカ独立100周年記念募金に言及した人。

4　“We began regular school exercises Oct. 24.” この１行の記述をもとに、1876年を同志社女子部の創立記念日としている。

5　Jerome Dean Davis（1838-1910）ベロイト大学、シカゴ神学校卒業後来日。最初は神戸、次いで京都に転じ、新島襄と二人で同志社最初の教員となる。

6　女子塾としての京都ホーム開設時の生徒数および氏名に関しては、資料により多少の違いがある。スタークウェザー以外では　①J. D. Davis 寄宿生５名と通学生10名　②D. W. Learned（1848-1943）寄宿生７名と通学生４名と記している。

7　Leroy Lansing Janes（1838-1910）ウェスト・ポイント士官学校卒の砲兵大尉。熊本洋学校に招かれ、英語および近代科学を教えた。廃校後、「熊本バンド」の生徒30名（内、クリスチャンは19名）を同志社に送り、彼らは同志社英学校の基礎を築いた。

8　下村孝太郎（1863-1937）。父の狼藉のため少年時代から母と多数の姉妹を扶養する義務を負い、苦学する。アメリカに留学し、帰国後はハリス理化学校の教頭となる。新島襄は彼の一家を親身に世話をした。

9　宣教師文書の中では、同志社英学校は Kioto Training School と呼ばれた。「同志社仮規則」には、社長新島襄、結社人山本覚馬の連名で、「社ヲ結ヒ英学校ヲ開キ之ヲ同志社ト称ス」とある。カレッジを目指した新島の意図とトレーニング・スクール設立が急務であったボード側の意図とは当初からずれがあった。

10　金森通倫（1857-1945）「熊本バンド」の中で真っ先に同志社に入学し、新島襄から洗礼を受けた最初の学生。卒業後、岡山伝道の成果が評価されて、同志社教会教師に招聘された。新島の晩年、同志社の教頭も務めた。

11　パウロが、イエスを迫害していたころの、回心する前の名前。タルサスはトルコ南部の都市。古代キリキアの首都で、パウロの生地。

12　下村孝太郎の二人の妹、知亀と末。

13　本間重慶（1856-1933）同志社英学校の第一期入学生。三重県久居出身。熊本バンドから大勢の生徒が同志社に来てからはやや亜流となり、最終的には英学校を卒業していない。しかし、同志社時代から市内伝道や彦根伝道に励み、彦根教会の初代牧師として赴任。スタークウェザーの日本語教師をしながら、許嫁の春を

京都ホームに入学させた。

14　本間春。幼いころ両家によって取り交わされた婚約であったが、後に重慶が同志社で学び牧師を目指すようになったことから、彼は春にもキリスト教の勉強をしてほしいと強く願った。郷里での猛反対があったにも拘らず、何とか春を京都に連れてくることができ、京都ホームで勉強ができるようになった経緯については後出。

〈74〉【秋山恭子 訳】

日本の京都にて、1877年５月19日、チャイルド[1]宛

拝啓

数週間前、私はあなた様に、仏陀つまりお釈迦様の有名な涅槃図の掛軸を収めた小箱をお送りしました。船が出港する前にその箱の中に手紙を添えるつもりでしたが、今まで手紙を書く時間がありませんでした。

あなた様は、お釈迦様の慈悲の心についてはご存知ですね。しかし、お釈迦様の入滅に、すべての創造物が深い悲しみに暮れている様子を伝えているこの光景は、私が今までに見たどれよりも優れています。画面の左手、お釈迦様の頭上の木の枝［沙羅双樹］に、薬を入れた袋が掛かっているのが見えますね。それは、右手上方の雲海から、天国のお医者様たちによって投げられたものです。話によれば、もしもその薬の袋が木の枝に掛からずにお釈迦様に届いていたら、入滅されなくて済んだのだそうです。しかし今は、菩薩たちや鬼神、仏弟子、民衆、罪人、動物、鳥すべてが、一堂に会してお釈迦様の入滅を悲しんでいるのがわかります。

この掛軸は、京都の寺に長年掛けてあったものですが、住職の友人が、私のために手に入れて下さったのです。表装は、あなた様にお送りするために新しくし直しました。涅槃図は、高く評価されていますので、あるお寺[2]には、25フィート平方の大きさで、同様の光景を描いた有名な涅槃図が所蔵されています。もちろん、素晴らしく克明に描かれており、なかなかの見ものです。哀れな異教徒は、どんなに多く神々を持っていても多すぎることはないと思っ

ていることは明らかです。ですから、この善き立派な人が入滅し仏様になられた後は、仏教徒のお祈りの次の部分が示すように、永遠に増殖し続けるのです―「全ての仏様が私の中に宿りますように！あらゆる知恵でもって教えたまえ、導きたまえ、救いたまえ。どうぞ、完璧に救いたまえ！清めたまえ、どうぞ、完璧に清めたまえ。ああ、全ての生き物を救いたまえ・・・。」

昨日は、盛大なお祭りの日でした。肩に神輿を担いだ人たちの長い行列が、通りを練り歩いていました。家から出て来た人たちは、柏手を打ち、頭を下げて恭しく拝んでいました。その光景は、確かに、全く「異教徒」のものでした。神輿の行列が通り過ぎる間、家の中に入っているように勧めて下さる家族に対して、私の心は痛みました。その家の方はとても上品で、親切で、知的に見えますが、他の客人と一緒になって神道の神を繰り返し拝んでいました。

この人たちは、定期的に説教が行なわれているラーネッド教授[3]の家から僅か数軒の所に住んでいます。彼らは、私たちにはいつも親切なのですが、今まで礼拝に参加することはなかったと思います。このような盛大なお祭りに出逢うと一瞬がっかりする気持ちになります。しかし、通りの次の角を曲がると、キリスト教への希望を抱き、顔を輝かせている若い改宗者の一団に出会えます。改宗者たちはお祭りの行列を単なる子供の遊びと見なし、夕方の祈祷会では「古い古い物語［イエス様のお話］[4]」を進んで語り、ただ一人の真の神を指し示します。入口のあたりに集まっている熱心な聴衆はオルガンの音色に魅了されて、もっと聞きたいと一人ずつ、中へ入ってきます。「あのオルガン[5]！」のことですが、それがどれほど役立っているかをお知りになれば（でもお知りになることはできないですね）、そして、オルガンが着くまでは、市中の２箇所の伝道所で、不調和な「うなり声」しか聞けなかったのに、全声合唱団の美しい旋律が聞けるようになったことをお知りになれば、ボストンの皆様も、うかつにもしてしまったと思われている間違いをお許しくださることでしょう。

私は、オルガンが来れば、どれほど喜ばれるだろうとわかっていましたし、そのような寄贈品を受取ることは、（ウーマンズ）ボードにとっても有難いことだろうと心底思いましたので、ハートフォードの友人たちに「所定の手続きを経ないで」オルガンをお願いしてしまったのです。手続きを間違ってしまったということに気がついて、申し訳なくもありましたが、驚きもしました。私たちは、オルガンを受取るまでに、早くても、ほぼ１年は待つことになるだろうと思っていたのです。しかし、「彼らが呼びかけるより先に、わたしは答える」[6]という主の約束は、当地の私たちに十分に果されつつありますので、将来の計画はそれに従って立てねばなりません。

私が「たまたま‘パシフィック新聞[7]’を取り上げた」時には、すでにハートフォードへの手紙を出してしまっていました。ボストンから喜望峰を回る、果てしない大海原のことを考えると、カリフォルニアの姉妹たちは隣人のように思えるということはわかっていただけますね。そして、「ワトキンズ夫人のオルガン[8]」「彼女は最早そのオルガンを必要としていないのですが、どう扱いましょうか？新たに使うことを考えてみませんか？」という記事を読んだとき、私は京都の宣教師仲間に相談し、それを日本で「新たに使う」と提案しても不都合はないはずだということで意見が一致しました。あちらから何か言ってこないうちに、直ぐにオルガンが送られてくるとは夢にも思ってはいませんでしたし、送っていただけるという好意的な言葉が聞けるなら、ハートフォードに手紙を書いて、送っていただかなくて結構ですと知らせるのに十分な時間があると思っていたのです。しかしハートフォードの皆様もまた、私たちのために、すぐに行動を起こしてくださいました。確かに［主は］私たちの「杯を溢れさせてくださる」[9]のです。すべての善良なる人々に神のご加護がありますように！

お春さん［本間春］が、「主、われを愛す」を弾きながら英語で歌い、「主は我が羊飼い」を日本語で歌っているのが聞こえてきます。彼女は、私たちの学校に４月３日に入学して以来、わずかしか経っていないのですが、もう

すでにこの２曲の讃美歌を上手にオルガンで弾いたり、歌ったりできます。この手紙がそちらに着くまでには、彼女にもう２曲教えているでしょう。つい昨夜、お春さんはもうすぐ夏休みが来ると知ったとき、がっかりしたわ、と言いました。ここにいて、もっと学びたいと希望していたからです。彼女はイエス様について聞くすべてのことを吸収し、勉強面でも素晴らしい成果をあげ、*The Peep of Day*[10]もちゃんと読んでいます。お春さんは、お送りする写真の No. 1 の人です。彼女が京都の学校で友人と共に写っている写真を見れば、親戚の人の気持ちも和らぐだろうと思いました。親戚の人たちは、お春さんが「イエスの学校」に入学することに大層不本意だったのですから。

No. 2 は、お春さんの許婚です。（ところで、彼女は14歳ですが、双方の親の合意で幼少の時から婚約しておりました。現在その風習は廃れています。）彼は、聖書をよく学び、婚約者のお春さんもこちらに来てイエス様について学び、将来牧師職につく自分に相応しい伴侶になってほしいと祈っていました。この二人について書けば長くなりますが、私にはどんなロマンスよりも興味深いのです。あなた様も２ヤードに及ぶ手紙をお読みになりさえすれば、そのようにお思いになると思います。彼はお春さんを連れて来るために帰っていた、40マイル先の故郷から私に手紙を寄越してくれたのです。手紙には彼の試練と勝利が述べられ、神と私に心から感謝して戻りますと書かれていました。私はこの件では味方してほしいとかねてより頼まれており、今、彼は、私の日本語の先生です。本間さんは勉学と教会の仕事に専念しているので有能な牧師になるだろうと思います。現在、彼はドーン宣教師[11]の家で始まった教会で仮牧師の仕事をしています。ドーン宣教師のバイブル・クラス［の写真］[12]の右端に写っているのが本間です。日本を去るドーン夫妻を乗せた船が、明日、神戸を出発します。お二人がいなくなれば、どんなに寂しくなることでしょう。ドーン宣教師は若者のために大変立派なお仕事をされました。ご夫妻は私たちみんなに喜びや祝福を与えてくださいました。このように身体の健康には恵まれているお二人を解任するということは、測り難い摂理の

ように思えます。しかし敬愛するドーン夫人の心はあのような状態[13]なのです。

ここでの働きに対する皆さまの思いやりのある、志の高いご計画すべてにとても感謝しています。「女学校」について特別な関心を示されたクラーク博士の手紙を読んだ１時間後、私たちは熊本のキャプテン・ジェーンズの元生徒だった伊勢さん[14]が東京の「開成学校［東京大学の前身］」から到着したことを知りました。彼は、全身全霊打ち込んだ誠実なクリスチャンです。伊勢さんと他の２人の「兄弟たち」[15]は、日本での最高の学校にいました。国内の重要な地位はその学校の卒業生で占められているのですが、彼らは、京都の「同志社」に入学するためにそこから来たのです。そして私たちの女学校に姉妹[16]や友だちを連れてきました。その少女たちは、極めてまれなことですが、恐らくすでに４年間勉強をしており、かなり上手に英語を話し、読めるのです。ただしグループのうちの１人の少女は、それほど勉強は進歩していません。

現在の施設［御苑内　柳原邸］では収容能力に限界があります。それで以前から大きな関心を持って、私たちの必要に適合する一区画の土地の購入を考えています。伊勢さんは、東京の開成学校では300人の学生のうち、４人だけがクリスチャンで、私たちのところにやって来た３人を除けば、たった１人だと嘆いています。その学校のクリスチャン教授［お雇い外国人］は、信仰のことは話そうとしないし、日本人の教授は外国のものは信じないという考えを受け入れてしまっており、教会から２マイルも離れた所に住んでいるのです。クラーク学長[17]がアメリカへ帰国する途中、京都に立ち寄られました。たぶん先生自身の口から、直接ご自分が蒔いた貴重な種の話をお聞きになることでしょうが、彼には、１年間の短い在職中に信仰の種を蒔き芽が出るのを見る特権が与えられていたのです。彼は任地へ行く前に、まず、東京の同じ教授仲間に尋ねました。教授たちは聖書を教えることは許されないだろうと告げました。しかし、クラーク学長は16人の有能なクリスチャンの青年[18]を育て、自分が成し遂げた行い全てを日本政府に認めさせたという功

績を残しました。

私たちは、ダイヤー夫人[19]の到着をずっと根気よく待ち望んでいます。彼女を歓迎するのは、なんと嬉しいことでしょう。女生徒たちも待ち構え、「お越しいただき、とても嬉しいです」と申し上げたいと言っています。あなた様も、生徒たちが「世の主は、イエス」や、その他の英語と日本語の讃美歌を歌うのをお聴きになれば、きっとお喜びになることでしょう。新しい日本語訳の讃美歌「砦を守れ」は、出来たばかりなので長く歌い継がれることでしょう。皆様には、今まで直接お会いしたことはないのですが、イエス様のために働き勝利することを願う点では一つであるボストンの皆さまのお写真がいただければ、どれほど嬉しいでしょうか。これまでに与えられた皆さまの愛のお働きに感謝します。皆さまが私たちのために祈ってくださることを有難く思います。本当に、私たちには祈りがとても必要なのです。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

1　Miss Abbie B. Child（東部）ウーマンズ・ボードの書記（Home Secretary）

2　東福寺か泉涌寺のことか？泉涌寺には、江戸中期の画僧・明誉古礀（みょうほこかん）（1652～1717）による、高さ15.1m、幅7.3mの涅槃図がある。通常、天井から床面にわたって掛けてあるので、正面に見えるのは7.3m（約25フィート）四方の図（光景）である。

3　Dwight Whitney Learned（1848-1943）イェール大学卒の牧師・学者。初期同志社の中軸的教員。半世紀にわたって同志社で教鞭をとり、同志社大学の初代学長も務めた。

4　英語の讃美歌集 *The English Hymnal*(基督教音楽出版　1955)の中に120番“Tell me the Old, Old Story”（下線坂本）が収録されている。この讃美歌のリフレインの最後の行、‘Tell me the old, old story, Of Jesus and His love. A-men’ で示されている通り、英語圏の人が ‘the old, old story’ と聞くと、「イエスと彼の愛の物語」と分かるのである。

5　当時ウーマンズ・ボードの間では、京都にある２台のオルガンのことが話題に上っていた。１台は、スタークウェザーの故郷コネチカット州ハートフォードの友人

たちの寄贈品であり、もう１台はパシフィック新聞に記載された「不要になったオルガン」のことである。２台とも所定の手続きを取らずに受け入れたことが問題になっていたようである。ここでは、前者のオルガンを指す。

6　旧約聖書「イザヤ書」65：24

7　*The Pacific* は、1851年創刊の週刊誌であり、「太平洋岸で発行された最古の、発行部数の最も多い、もっとも創意工夫のある、有能な記者の筆による最大の宗教誌」と広報されていた。1875年24巻から、毎号 Woman's Board of the Pacific の欄が設けられた。

8　"Mrs. Watkins' organ" に関しては、*The Pacific* 誌上で1876年５月頃から話題となっている。最初は彼女の赴任地メキシコに運ぶ運賃と関税の募金のためであったが、半年後には「体調を崩して帰国することになったワトキンズ夫人のオルガン」の再利用に関する記事として掲載された（*the Pacific* 1876. 11. ９日号）。それがスタークウェザーの目に留まったのである。この記事の顛末に関しては本文参照。

9　旧約聖書「詩篇」23：５

10　*the Peep of Day, or A Series of the Earliest Religious Instruction* アメリカで出版された日曜学校教材。旧約聖書の話が１話ずつ完結する形でまとめられている。明治40年ごろに『暁天』という題で邦訳が出る。

11　Edward Topping Doane（1820-1890）ミクロネシア島ポナペから京都に来た。音楽の素養があり、同志社における最初の音楽教師でもあるが、自宅に西京第三公会を設置した。本間重慶はそこで仮牧師に選ばれた。

12　ドーン宣教師のバイブルクラスの写真は、本井康博『京都のキリスト教』（同志社教会双書３　1998年）のグラビアページ14　xii に掲載されている。

13　Clara Hale Strong Doane（1841-？）J. D. デイヴィス宣教師夫人ソフィアの姉の精神不安の状態を指す。彼女は夫の赴任地ミクロネシア島ポナペで体調を崩し、ドーン宣教師より一足早く来日してデイヴィス一家と同居していた。1876年２月ごろ新島家で始まった女子塾では八重と共に教師をしたが、精神の状態が安定せず、結局夫に伴われて、1877年５月５日に帰国することになった。ところが、その日になって比叡山に登り行方不明になり、同志社では捜索隊を組織して探索。翌日にやっと原生林の中で見つかった。

14　横井時雄（1857-1927）一時、伊勢を名乗る。熊本バンドの一人で、横井小楠の長男でクリスチャン。熊本英学校廃校後、東京で勉学を続けていた。

15　山崎為徳と和田正幾：山崎為徳（1857-1881）は岩手県水沢出身であるが、熊本英学校で学ぶ。のち、開成学校を経て同志社英学校余科へ。卒業後、同志社教授兼幹事として新島を助け、伝道にも協力したが、早世。和田正幾（1859-1933）

は1876年開成学校に入学していたが、G．コクラン（George Cochran 1834-1901）から受洗し、伝道者となる決意で大学を中退した。伊勢・山崎と共に、同志社神学校に移ったが、１カ年で健康上の理由で退学した。

16 一人は横井時雄の妹、横井宮（海老名宮　1862-1952）。横井宮と徳富初（湯浅初 1860-1935）は熊本英学校の廊下で勉強した。宮は京都に来てから、1877年12月２日、西京第二公会で新島襄により受洗。1882年海老名弾正（1856-1937）と結婚して牧師夫人となる。

17 William Smith Clark（1826-86）アメリカの農学者、教育家。アーモスト大学で新島を教える。1876年札幌農学校設立のため１年間の契約で招かれる。クラークによるキリスト教精神に貫かれた影響は学生に強い影響を与え、１、２期生により札幌バンドが形成された。

18 クラークの感化によりキリスト教に改宗した札幌農学校の生徒たち。彼らは後に札幌バンドを形成したが、その中には内村鑑三（1861-1930）・新渡戸稲造（1862-1933）・佐藤昌介（1856-1939）・大島正健（1859-1938）らがいる。大島は、後に同志社大学教授となる。

19 Mrs. Dyer は宣教師として京都着任が予定されていたのであろうが、実際には来日しなかった。